



ちょっとそこまで ～お散歩日和（名言編）～



読書のコツは、賢明な飛ばし読みにある。…… P・G・ハムトン



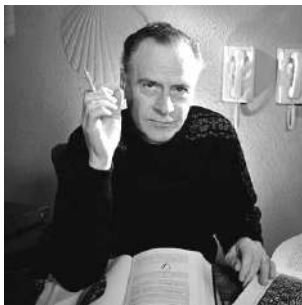
読書ほど楽しいものはないと思うから、これまで長きに渡って、担任する子供たちにそのきっかけを作ろうとそれなりに取り組んできましたが、今はもうすっかりその気は失せてしまいました。余りにも虚しい作業だからです。恐らく子供たちの読書嫌いの理由は、私がテレビ・ゲームに全く興味を示さないのと同じなのだろうなと思っています。私はテレビ・ゲームを面倒臭いと思うし、楽しいと思ったことは一度もないし、自分の人生を豊かにするものとして到底受け入れられないからです。子供たちの、読書に向き合う感情と方向性が真逆だけで、ほとんど同じ心情ではないかと想像します。

もちろん、読書好きな子はそれなりにいますが、その子たちは私が介在しなくても十分に読書好きになっていますから、そこに私の存在理由は見当たらないと思っています。

さて、冒頭の言葉をどう考えましょうか。

高校時の国語教師が、名作文学の粗筋だけをまとめた1冊の本を教室にもってきて自慢したことがありました。詳細は覚えていませんが、「こいつ馬鹿じゃねえ？」と思ったことだけはよく覚えています。

しかし、今にして思うと、この教師の心境が分からなくはありません。読みたいと思う本はたくさんあるのに、時間が追い付いていかないのです。結局、図書館から借りてきても読まずじまいで返却するという事は日常的な事です。ある意味、読書は多分に気力の問題でもあるのです。具体的な必要や動機があるときは早く読めるのに、のんびり読み出した本はなかなか捗らないというのがその典型です。



恐らく、あの時の高校教師は生徒に教材として指導すべき文学作品が膨大にあるにもかかわらず、読み切れていない自分に劣等意識を感じていたに違いありません。自分なりにダメ教師になりたくなくて足掻いていたのでしょう。そう思うと、意地らしく思えてきますから不思議なものです。

ところで、カナダの文明評論家マーシャル・マクルーハンが、メディアを「熱いメディア（ホットなメディア）」と「冷たいメディア（クールなメディア）」に区別したことはとても有名です。

- ・熱いメディア……単一の感覚を高精細度で拡張する、情報量の大きいメディアで、受容者が情報を補完したり情報交換に参加したりすることが少ないもの。写真・ラジオ・映画など。
- ・冷たいメディア……単一の感覚を低精細度で拡張する、情報量の小さなメディアで、受容者が情報を補完したり情報交換に参加したりすることが多いもの。漫画・電話・テレビ・会話（話し言葉）など。

分かったようで分からない分類法ですが、ここで触れたいことは、「二度見」が有効かどうかで両者を分けると見えてくるものがあるということです。例えば、感動した映画があったとします。恐らく2度目3度目と続けても、その度ごとに新しい発見に満ち、また違った感動に浸ることができるはず。これが「熱い」と称する理由です。それに対して、一度交わした会話を再度繰り返したいとは思わないはず。ボイスレコーダーで記録した原稿を書き起こす作業ほど虚しく疲労感が増すものはあ

りません。感動した小説もそうではないでしょうか。いくら良かったとの感想をもったとしても、何度も繰り返して読む気にはなりません。だから「冷たい」のです。

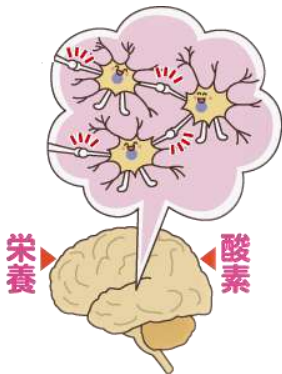
ところが、同じ読書でも専門書となると様相が変わってきます。何度も繰り返し読まないと内容を理解できないばかりか、何らかのメモを取らないと全体像を把握できない事態になります。これは明らかに「熱い」症候でしょう。

さあ、やっとここで私の本意に触れたいと思います。読書は楽しい。しかし、もっと楽しいものにするために「二度読み」をお勧めしたいということです。1度目はざっくりと。そして2度目にじっくりと読むのです。私の場合は、アウトライン・エディタを使って、1度目に読んだ本の中から心にフックしたものを書き出していきます。文章量が多い場合はスキッピングします。何も考えずに、とにかくどんどん書き出します。読み終わったら、これで1冊の読書ノートの完成です。それから、やおら、2度目の読書を開始するという具合です。これが私の読書術です。数多くの引用が可能なのもこのためです。



「私という人間は今まで読んだ本を編集してでき上がっているのかもしれない。逆にいえば、本によって編集されたのが私なのだ。」

とは、資生堂の名誉会長でもある福原義春氏の言葉です。そうかもしれないと思う節が数々あります。しかしその一方、私たちにとって「読んだ」と自信をもって言える本がこれまでに何冊あるというのでしょうか。そのほとんどは「賢明な飛ばし読み」によるものではないか、そう思えて仕方ありません。「二度読み」の勧めとともに、読書に際して頭の隅に置いておいても良い言葉だと思えます。



このように、人から話を聞いたり、本を読んだりすると何かを知ることが出来ます。でも、「ふーん」とか「へえ？」と感心しつつも、そのまま素通りしてしまうことがほとんどです。その時に一旦立ち止まって、もう少し掘り下げてみようとか、いや、そもそも自分は どうして「ふーん」や「へえ？」と肯いたのだろう、などと反芻してみることは滅多にありません。

「考えない」のは「学ばない」のと同義語ではないでしょうか。それは、ご飯を食べるのと同様で、「考える」ことは脳にとっての栄養源を与えているとも言えると思います。考えなければ「頭」は栄養失調になってしまうからです。

食事の時に、「何度もしっかり噛んでから食べなさい。」とはよく言われる言葉です。牛は4つある胃で消化しやすくなるよう、食べたものを口に戻してはまた飲み込むことを繰り返します。これを「反芻（はんすう）」と言います。同じように何度も繰り返し考えることで、言葉の意味が整理され理解でき、やがて体に馴染んでいくのです。



「書を読んで考えないのは、食べて消化しないのと同じだ。」（エドモンド・バーク）

深く考えようとはせずに、ちょっとかじったことを、さも知った気になり理解したと勘違いして、それで良しとしているのは、自らの血となり肉となっているとは言い難い状態です。私は、勉強とはそれでは不十分だと思っています。面白さと苦しさは表裏の関係なのです。



そういう意味からも、「二度読み」を是非ともお勧めするのです。最後に丸谷才一の言葉で締めくくりといたしましょう。

「面白い本を読まなければならない。つまらない本をねじり鉢巻きして読むから読書が面白くなくなる。面白くなるためには、自分が不思議だと思うことをたくさん貯めることだ。」

（終）



ちょっとそこまで ～お散歩日和（植物編）～



木へんに春で椿（ツバキ）、木へんに夏で榎（エノキ）、木へんに秋で楸（キササゲともアカメガシワとも）、そして今回紹介するのが木へんに冬で柊（ヒイラギ）です。

ヒイラギを取り上げたのは、2月3日の節分を終えたばかりだからという単純な理由からです。昔から節分には鬼が出やすいと考えられ、その鬼を追い払うために柊の枝にイワシの頭を指した「柊鯛」を飾る風習がありました。鬼は柊のトゲとイワシのニオイを嫌がるからです。トゲは目に刺さるからと言うので何となく分からないでもありませんが、ニオイについてはよく分かりません。臭いではなく、イワシを焼く時の煙が嫌だからという説やイワシを餌に誘い出し、とげで目を刺



すからというトラップ説もありますが、イワシはすぐに鮮度が落ち、悪臭を放つので鬼がその匂いを嫌がるからというのが最も受け入れやすい気がします。



鬼門（丑寅：北東）の方角に柊の木を植えておくと悪いものを遠ざけると信じられていますが、桃太郎の家来にどうしてイヌ・サル・キジが選ばれたかと言うと、鬼門の逆方向は裏鬼門（南西）に当たり、そこから時計回りに申酉戌となることに拠ります。

ちなみに西洋でもクリスマスには悪魔を近づけないためにセイヨウヒイラギを飾るのは偶然の一致でしょうか。どうもキリストが磔刑に処されるときに頭にイバラの冠を被らされていますが、そのトゲが苦難の、さらに赤い実がキリストの流した血として、そして、冬でも枯れない緑の葉が永遠の命としての象徴とされるからのようです。単に飾り付けとして見栄えがするからだと思いますが、意味付けすることで文化の質は高まりますから、長い年月の間に浸透していったのでしょう。いずれにしても、洋の東西を問わず、ヒイラギには魔除けや厄除けの力がある信じる点は共通しているのは、面白い事実です。その見分け方ですが、葉の形状だけでは判別できません。しかし、ヒイラギは葉が一か所から左右に発生する「対生」なのに対して、セイヨウヒイラギは互い違いに発生する「互生」なので、その点で区別するとよいでしょう。

当団地では、11号棟の、まさに鬼門に位置する北東に3本並んで立っています。



ところがよく見てみると、手前の2本と奥の1本とで、とげの数が明らかに違いますし、全体的な印象も微妙に違います。園芸品種が違っているからなのか、それとも単なる樹木の個性でしかないのかわかりませんが、昔から、老木になると、とげの数は減ってくるとよく聞きますから、その影響もあるのでしょうか。まるで人間と同じです。

もう40年近く前になるので裏覚えですが、季語について面白おかしく語った随筆集があって、その中に、

ヒイラギについて触れた項目がありました。そこに、クリスマスリースに使われているヒイラギに赤い実が飾られているが、ヒイラギは紫色の実だ。勝手に変えるなみたい話が載っていました。面白いと思って早速学級通信に書いたら、即保護者から手紙が届きました。日本のヒイラギは確かに紫色の実が付きますが、セイヨウヒイラギには赤い実ができるので間違いではありませんと。引用先は江國滋の著作物ではなかったかなとその後必死に探したのですが、全く見当たりませんでした。

そう言えば11号棟のヒイラギには実が付いていませんでした。雌雄異株ですので、雄株ということになります。花は秋に咲くのですが、ヒイラギの存在自体に気付いたのが今ですから、今後注視していきたいと思います。

練馬区の名木としては、ヒイラギが1本だけ登録されています。田柄にある愛宕神社のヒイラギです。入ってすぐの左手にあります。相当な老木で、案の定、葉のトゲの数は少なかったです。

ここで少しトゲについて触れてみたいと思います。トゲは、植物による「食べられることを防ぐ」防衛本能のしくみです。逃げることも隠れることもできない植物は、武装することによって草食動物・昆虫・菌類・細菌・ウイルスなどの食害を防ぐこととなります。もちろん、その手立はトゲに限らず、毛を生やしたり、粘液を出したり、えぐみや渋味や苦みの成分を組織に含んだり、蜜を出してアリを呼び寄せたり、と非常に多岐に渡ります。

そこで、ヒイラギのトゲについてですが、スペインの研究チームの解析によると、野生のヤギやシカが食べたとみられるヒイラギの木では、根元の近くから高さ2.5mまでの葉はトゲが多く、それより高い位置にある葉にはトゲがないものが増える傾向があったとの報告があります。そこで、彼らは、1本の木に生えるすべての葉は、遺伝的には一卵性双生児の関係にあり、まったく同じDNA配列を持っているにもかかわらず、このような結果が出る原因を突き止めようとしたのです。

研究チームはDNA内でメチル化と呼ばれる化学的プロセスの痕跡を調べました。メチル化によって遺伝子配列には影響を及ぼさないけれど、それぞれの葉のDNAに変化が起きていることが分かったそうです。詳しくは分かりませんが、動物による捕食によってメチル化が進み、そのために葉の形状の変異が起きるといった関連性を導いたのです。このことは、加速する環境変化の中で、植物はDNAの変化を待つことなく迅速に対応する能力と生き残るための知恵を身に付けていることを示唆します。じつに興味深い研究結果だと思います。

このことと関連があるのかどうか分かりませんが、御蔵島に住んでいた頃に不思議だったことがあります。それは、ノアザミのことです。わずか20キロ離れた三宅島のノアザミにはトゲがあるのですが、御蔵島のノアザミにはトゲがないのです。移植するとトゲが生えたり消えたりするという話も聞いたことがあります。



ついでに、8号棟と9号棟の間の通路に、ヒイラギナンテンが植栽されています。ヒイラギがモクセイの仲間、セイヨウヒイラギがモチノキの仲間なのになんか、このヒイラギナンテンはメギの仲間です。全て葉の形状が似ていることからヒイラギの名称が付いていますが、全く別の品種です。

改めて後日、ヒイラギナンテンについては取り上げてみたいと思っています。

(終)



ちょっとそこまで

～お散歩日和（地域編）～

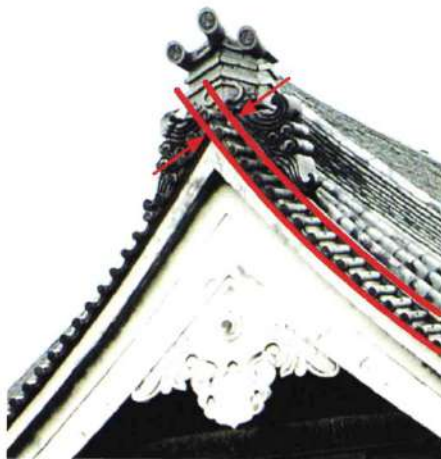


ご存知葛飾北斎の「富岳三十六景」から「東都浅草本願寺」の図です。ここでは、見事な構図の妙を見せてくれています。手前右手には本堂の屋根を大きくクローズアップし、遠景下に浅草の街並み、さらにその奥に富士を据えるとともに、空に高く揚がる鳶（とび）凧と、よく分からないけれど存在感のある櫓（やぐら）が組みられています。

よく見ると、本堂の屋根で、瓦職人たちが吹き替えでしょうか、何やら忙しく作業をしています。目を凝らしてみると、人数は5人もいます。はたして、こんな危ない工事が可能なのでしょうか。そのトリックについて、実際の浅草本願寺の屋根と比較した解説が「富嶽三十六景を読む」（有泉豊明著）にありました。引用します。

東本願寺の本堂の屋根の鬼瓦は、「経（きょう）の巻鬼瓦」と呼ばれる鬼瓦です。なお、鬼瓦とは「棟の端に取り付ける飾り瓦」のことですから、この「経の巻鬼瓦」の前方部分には、本来「掛け瓦」と呼ばれる化粧瓦が横一列に並べられているだけです。

しかし北斎の描くこの「東都浅草本願寺」の本堂の経の巻鬼



現代の東本願寺・本堂の掛け瓦



北斎の描く東本願寺・本堂の掛け瓦の部分

瓦の前方に位置する「掛け瓦」の部分には、北斎苦心の見事な大きな間違い（でたらめ）が描かれております。現在の東本願寺本堂の「経の巻鬼瓦」の前方の「掛け瓦」の部分と、北斎の描く「掛け瓦」の部分とを比較してください。（前ページの比較図を参照）

「掛け瓦」は鬼瓦の前方の狭い空間に横一列に並べられた飾り瓦です。（左の、赤で表示部分）しかし、北斎の描く東本願寺本堂の経の巻鬼瓦の前方の「掛け瓦」の部分は異様に広く、奇妙な瓦様構造物が3列も並べられ、この部分に3名もの職人が悠々と作業を行っております。（右の、赤で表示部分）

北斎は本来、「経の巻鬼瓦」の前方に位置する構一列の狭い空間に過ぎない「掛け瓦」の部分をも、極端に広大な部分として描いております。なんと奇抜で雄大な発想でしょうか。

引用は以上です。浅草の東本願寺の鬼瓦部分をいろいろと探したのですが、適当な写真を手に入れませんでしたが、次の写真を見れば、北斎の図より、明らかに幅が狭く、とても人が何人も立って作業できるような広さではないことは明白です。



北斎は、このように物事を写実的にとらえるだけではなく、背景や構図など、空間に独特の表現を含ませ、見るものに斬新な世界観を示すことに卓越した画家であるということを改めて認識させてくれます。

ついでに触れますと、最近読んだ本に、梶よう子著「広重ぶるう」があります。ここでは、歌川広重が、鳴かず飛ばずの貧乏暮らしの中で出会った、北斎

の使う舶来の高価な顔料「ベロ藍」の、深く澄み切った色味に開眼、一念発起する姿が描かれています。遠くゴッホをも魅了した絵師の、比類なき半生に大きな影響力を与えたのが、北斎の「藍摺絵（あいずりえ）」だったというわけです。そう思ってこの作品を見直してみるとなんと藍色を多用していることか。「ベロ藍」とは、今で言う「プルシアン・ブルー」のことで、当時はベルリンから伝わってきたことから「ベルリン藍」、それがなまって「ベロ藍」と呼ばれていたそうです。

長々と、北斎の作品紹介に終始してしまいましたが、本題はこれからです。

この絵の発想の原点は、おそらく浅草本願寺本堂の屋根と富士山の形が相似形を成していることに気付いたことに由来していると思います。当時の人にとっては、その両者を並べて見てみたいと誰もが望んだ筈です。誰もが望むのであれば、それを浮世絵に描けば売れる、そう目論む版元がいたのは当然の成り行きです。

そのアイデアに対して、実際にはこういう角度、視点で見ることは不可能ですから、想像力を逞しくして、「なら描いて見せようではないか。」と闘争心に火が点き、北斎が奮い立ったのではないかと思います。

実際、この作品と全く同じ構図の作品が、「江都駿河町三井見世略圖」です。この絵のユニークな点は、越後屋の賑わいを一切描いていないことです。先の広重の「名所江戸百景：駿河町」で



は人々の喧騒が伝わってくるほどですから、その違いはどこから来るのか興味をそそられます。

さて、その富士山と相似形をしている屋根が並んで見える場所が、私たちの住まいのすぐ近くにもあると聞いたら、皆さんはどう思いますか。

場所は、谷原ガスタンク（正式にはガスホルダーと言います。）の北隣、自動車教習所のコヤマドライビングスクールの東隣にある真宗会館別館です。

ここは、真宗大谷派東本願寺派の施設で、教法の聞信・宣布の拠点として設立されたもので、清戸道を挟んだ向かい側にある別館の屋根が、富士山の裾野の傾斜を模しているのです。



いつも不思議に思うのですが、宗教はどうしてこうも細かく分裂していくのでしょうか。そもそも親鸞が望んでもいない教団を作り、本願寺を建立し、さらに東と西に分かれていること自体とても不思議なことなのに、同じ東本願寺派でも、浅草本願寺は現在また別なグループ、浄土真宗東本願寺派の本山となっています。個人的に宗教に胡散臭さを感じるのはこういうことも一因です。教義の解釈が一人一人違うことに加えて、これに何らかの利益が重なるからなのではないかと穿った見方をしてしまいます。脱線が過ぎました、宗教批判をするつもりは全くありません。

話を戻します。

もしも現代に北斎が蘇り、この谷原の構図を見て、再び描くとすれば、ガスホルダーを加えた図になるはずで、それが下の写真です。左端に無線塔もあって、「浅草本願寺」の図と益々似ていることにお気づきでしょうか。この写真でははっきりしませんが、送電線の豊島園線のケーブルが横切っています。これを鳶の糸と見立ててみれば、マニア垂涎の構図と言えなくもないような気がしてきます。



この写真は練馬区立高松小学校の4階廊下から西を臨んで撮影しました。冬の夕暮れ時は西の空が深紅色付き、見事に美しい光景です。きっと高層階の方は毎日それを楽しんでいらっしゃるでしょう。（終）

編集 後記

これは春の匂い
真新しい着地（きじ）の匂い
真新しい革の匂い
新しいものの 新しい匂い

匂いかに
希望も 夢も 幸福も
うっとり
浮かんでくるようです

（黒田三郎「支度」より）

スイッチ一つで家事がすべて片付いたり、本で調べなくてもインターネットを使えば様々な情報が手に入ったりする時代となりました。人間は、何でも手軽に効率よく物事を進める方法を考え、大変便利な世の中を作り上げました。しかし、そのことで、子供たちに、人間として生きることまで簡単にできる方法があるのではないかという錯覚に陥らせるとしたら、大変恐ろしいことです。

川は、一滴のしずくが集まり、一筋の流れとなり、やがて大きな河へと成長します。子供の成長もこれに似ているように思います。「あの人のあの一言で私の人生は変わりました。」などとよく聞きますが、このようなことは滅多にありません。子供たちの成長には、特別な人の特別な働きかけよりも、日々接している人の、ほんの小さな働きかけの継続が重要だと思います。ほめたり励ましたりすることも重要ですが、じっと見守ったり、一緒に話を聞いたりといった日常的な静かな受容が最も大切なのです。

さて、早くも2月です。冬の代名詞といえば雪、春といえば桜、夏はホタル、秋は紅葉の姿が私たちを楽しませてくれます。雪の降る冬があって、桜の咲く春があって、蛍舞う夏があり、紅葉の踊る秋がある……、四季を代表するこれら、自然現象（雪）や植物（桜・紅葉）、生物（蛍）などは一見、まるでバラバラのようですが、実は共通項があると言います。桜や紅葉がはらはらと散り、蛍は川面をゆらゆらと飛び交い、雪はしんと降る。日本人が愛するそれぞれの風景は、そのテンポがすべて同じだと言うのです。

無風状態の時、ぼたん雪は秒速およそ50cmで降ってきます。舞い散る桜の花びらや紅葉の葉も秒速約50cmで落下し、蛍もおおよそ秒速50cmのスピードで飛び交うのだそうです。つまり、1秒間にわずか50cmしか移動しません。大人が普通に歩く速度は、軽く秒速1mを超えますから、いかにゆったりした動きかが分かるというものです。

同様の趣旨、発想に、新海誠監督のアニメ作品に「秒速5センチメートル」があります。作中、桜の花びらが舞い降りる速さとして紹介していますが、実際はそんなに遅くはありません。しかし、人と人が理解し合える速さはこれに近い感覚なのではないでしょうか。近付いたと思っても独りよがり過ぎなかったり、逆に、一気に親しくなれたはずなのに、時間軸を長く取ると儂い関係性しか築けていなかったり…。ただ、はっきりしていることは時間をかければ一歩ずつ着実に熟成していくことは間違いありません。そんな、思い通りには進まないまどろっこさと、でも焦らずに時の経過を待つことの大切さをこのタイトルで表現しているのだと解釈しています。

そして、こうしたゆっくりしたテンポこそ、本来の日本人が最も好み、日本の美学を育んだテンポだと思います。万葉集以降、雪を桜を蛍を愛した多くの歌人、作家、画家がいました。文化人に限らず、その風景が人の心を癒し、やすらぎを与え、日本人の心を豊かにしてきたことは、今残る生活習慣からも容易に想像できます。これからの時代、生活と風流のテンポはもちろん違うでしょうが、せめて「秒速50cm

の美学」を心に宿すことから一步を踏み出したいと思います。その心の豊かさが、「じっくり」という姿勢と気持ちのゆとりを生み出すのではないのでしょうか。（タコヤキマン）

